

地域子育て支援拠点研修事業<東京開催>

《開催概要》

- 開催日 平成26年10月19日(日) 10:00~16:30
- 会場 東京ウィメンズプラザ B1Fホール
- 主催 一般財団法人こども未来財団
NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 東京都・子育て応援とうきょう会議・(社福)全国社会福祉協議会・
(社福)東京都社会福祉協議会
- 参加者数 176名(女性171名、男性5名)
(行政25名、NPO/任意団体102名、その他団体/企業41名、その他8名)

《プログラム》

■主催者挨拶

真野 寛さん 一般財団法人こども未来財団 総務部長



■プログラム1

あらためて地域子育て支援拠点事業の4つの基本を考える

- ◆こどもが育つ環境づくりとは?
- ◆大人にとっても居心地のよい拠点とは?
- ◆拠点におけるプログラムのありかたとは?



【コーディネーター】松田妙子さん NPO法人せたがや子育てネット 代表理事

【事例報告】 大隅和子さん 浜松の未来を育てる会 こみみ広場 代表
松下妙子さん NPO法人ふじみ子育てネットワーク 代表

地域子育て支援拠点事業の基本4事業「①交流の場の提供と交流の促進②相談・援助③子育て関連情報の提供④講習の開催」について、配布したガイドラインも活用しながら、事例報告や会場参加者からの実践紹介と共に確認した。

＜事例報告＞

◆大隅和子さん 浜松の未来を育てる会 ここみ広場 代表

『予防的支援を目指し0歳親子の支援に取り組む』ことにも配慮しながら活動されているノンプログラム中心のひろばについて報告。

4事業の中でも特に以下の2つの項目については詳しく説明した。一つは「交流の場の提供・交流の促進」のための安心できる空間作り。子どもと親の支援ができる場として、家庭より少し癒しのある環境や、写真を示しながら子どもが主体的に遊べる場作りについて紹介した。また、「子育てに関する相談・援助」については、支援しやすい、相談しやすい「場」を作ると共に、相談しやすい「支援者」としての在り方や、浜松市の取り組みについても紹介。さらに、情報発信として、作成されているブログや通信、外遊びに関する啓蒙活動についても紹介した。



◆松下妙子さん NPO法人ふじみ子育てネットワーク 代表

まず、長野県富士見町の自然豊かな子育て環境を紹介しながら、子育てひろばAiAiの立地について説明された。『子どもの健やかな育ちを第一に』を柱とした活動を紹介。

次に、3つの視点として「子ども」「親（保護者）」「スタッフ」を挙げ、「子ども」が多様な体験をできることを重視した野外活動についてや、トラブルに対するスタッフの対応、室内外のリスクマネジメントなどについて紹介。「親（保護者）」に対しては、子ども・子育てに関する学び、実家のようにリラックスできる工夫なども例示した。



「スタッフ育成」については、コアスタッフ5名が等分に責任を負い、施設長一人に負担を掛けないという考え方を大事にされている。また、子どもの健やかな育ちに大切な大人の視点を地域に発信する目的で掲載している市の広報誌の記事についても紹介してくださった。

【会場からの参加者からの実践紹介】

◆飯盛裕美子さん（おやこ広場もくれんハウス）

スタッフが直接支援・アドバイスするだけでなく、地域全体で子どもを育む人・仲間づくりを目指す。ピアサポートの具体的な事例として、①外国人おやこのつどい（養成講座を受講した多文化センターがひろばまでの道案内や同行支援）、②ふたごちゃんみつごちゃんあつまれ（双子を育てた先輩ママによる経験談やアドバイス、当事者同士の支えあい）③赤ちゃんの日（お母さん同士が知り合い、話したり励ましあったりする場作り、仲間作り）④家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」との連携などを紹介された。



◆佐藤貴子さん（江東区深川北子ども家庭支援センター）

「話したい時に、そこにいる安心感」がモットー。ひろばでの相談や、相談室での相談の様子を紹介。配慮していることとして、こちらが思っている以上に利用者は緊張しているということを理解しておくこと、気になる人は個別に電話をすることもあるということ、2回目の来所の人については、スタッフにはさりげなくわかるような工夫をしていることなど、いくつかの具体例を紹介。親の様子や服装などから、目に見えないバリアに気づくことも大事であり、また、各機関やNPOとのつながりも大切であるということを伝えた。



◆佐野圭子さん（東村山市子育て総合支援センターころころの森）

情報提供の具体例として、東村山市の子育て情報ナビ「ころころネット」について紹介。市内の子育て支援情報について、カテゴリー別、ライフステージ別、目的別などで検索することができる。情報サイトの3つのコンセプトとして、「1. 子育て情報を得やすく（民間ならではの視点）」「2. 地域資源の集約と活性化」「3. 当事者参加（企画・製作・運営は子育て中の親とともに）」を挙げられた。中でも、「当事者参加」については、保育付き有償ボランティアによるサイト設計作業であることが紹介された。



■プログラム2 基調報告

地域子育て支援拠点の概要と展望

国からの最新情報を提供いただいたあと、会場との質疑応答も行った。

【講師】 竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長

【質疑進行】坂本純子さん NPO法人新座子育てネットワーク代表理事・ひろば全協副理事長

平成27年度から施行される子ども・子育て関連3法は、子ども・子育て家庭の状態に着目した財政支援の仕組みを変えるものである。

子ども・子育て支援新制度では、都市部・過疎地それぞれのニーズに合わせた保育サービスを維持し、認定こども園制度を改善して参入しやすくし、親の就労・保育時間に関わらず単一の施設で利用を継続できるようにする。また、3歳未満の在宅子育て家庭へのサービスの充実のためにも、地域子育て支援拠点の数は10000か所を目指している。支援者の皆さんには利用者に近い立ち位置で、保育とは違う専門性をもって利用者に寄り添う立場から、子ども・子育て会議に参加して利用者の意見を代弁していただきたい。

利用者支援事業の財源は、まず192億円用意しているが、消費税以外の財源が確保できたら、中学校区2か所に1つ程度配置していきたいと考えている。

利用者支援の意義は、自治体の計画のなかで、潜在的ニーズを把握し、サービスの供給体制を作っていくものである。子育て家庭の個別ニーズの把握とサービスの円滑な利用のため、マクロなレベルでネットワークを作り、ミクロなレベルでしっかりとつながりついでいき、車の両輪となって、地域の子育て家庭の施設利用につなげていただきたい。



この事業の強みは、利用者にとって垣根の低い、親子が利用しやすい場所で、施設や事業の内容を知らない方、自分が困っている自覚がない方などが、ふとした困りごと・悩み事を話すことからサービス利用のための情報提供・支援を受けられること。支援者の皆さんには、地域子育て支援拠点事業と立体的に連携し、これまで地域支援機能を持っていた拠点は、なるべく利用者支援機能も付けていくようになっていただければと考えている。

このたび作成した利用者支援事業のガイドラインに利用者主体、包括的支援、個別ニーズに合わせた支援などのコンセプトをいれているので、是非皆さんにも取り組んでいただきたい。



■プログラム3 講義

地域子育て支援拠点におけるソーシャルワークとは

地域福祉がご専門の原田先生をお招きし、地域子育て支援拠点事業と利用者支援事業が一体的に運営されていくために必要な視点や、地域子育て支援拠点で取り組むソーシャルワークの可能性について学んだ。

【講師】 原田正樹さん 日本福祉大学社会福祉学部 教授

ソーシャルワークとは、アメリカのメリーリッチモンドが提唱しました。彼女は「諸制度があっても環境と本人がつながっていないため、しなくてもいい苦労や困難が起こって個人で苦しんで我慢している人がいる。その人と社会環境との間を、個別にかつ総合的に調整することを通して人格の発達（エンパワメント）していくプロセスがソーシャルワークである」と言っている。

また、2014年の夏に開催された国際ソーシャルワーカー連盟では、新しいグローバル定義として「ソーシャルワークは社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する」が採択され、一層それらを社会に働きかけていくことが提言された。



コミュニティソーシャルワークとは、個別支援と地域支援を総合的に展開する援助を指し、フォーマルサービスだけでなく、インフォーマルなサービスの力をつなげて、地域の力を活用し、地域における自立生活を支援することを目指すこと。これは、利用者支援事業の利用者支援、地域連携と同じだと考えられる。

地域福祉のあり方として、最近の国の政策はどれも、個別と地域をつなぐコーディネーターが必要としている。個人の問題を地域の問題として捉え、コーディネーターが地域連携、地域支援のためのプログラムやしきけを行い、個別支援を行うための地域福祉の基盤をつくることが大切である。

そのためには、支援者が一歩踏み込んだ地域づくりをし、お互い様の精神で支え合いの文化を地域に作るとともに、アセスメントしながらニーズを探り、既存のサービスを探すといったケアマネジメントのスキルも求められる。アセスメントとは、本当は何に困っているのかを深く見定めることで、これもとても大切なことである。

しかし一番難しいことは、地域の方々の福祉意識を高めてもらい、どのように合意形成していくかということである。また、専門性を高める部分と、当事者性（ピア）の部分のバランスをどうとっていくかも課題である。

その際に福祉教育の実践が有効である。福祉教育とは福祉の価値を学ぶことであり、小さい頃から多様な人とかかわることはとても大切だと言える。その人ができることや生活の工夫を教えてもらうことで、できることではなく、できることを（強みストレングス）を大事にし、得意な事や好きなことを引き出しながらその人を支える視点を伝えていくことができる。

ソーシャルワークは、特別な人のためでなく、私や僕のしあわせのために、あたりまえがあたりまえでないことを想像してみることが大切。「ふくし」とは、「ふ」だんの「く」らしの「し」あわせ。これは、憲法で保障されている生存権や幸福追求権、平和と民主主義にかかわる重要なことだと考えられる。

■プログラム4 パネルディスカッション

「寄り添う、広げる、深める」～親子にとって身近な場での支援～

事例を紹介いただきながら、地域子育て支援拠点を核とした利用者支援事業について考えました。

【コーディネーター】 奥山千鶴子さん NPO法人びーのびーの理事長・ひろば全協理事長

【パネリスト】 原田正樹さん 日本福祉大学社会福祉学部 教授

塚原 泉さん 神奈川区地域子育て支援拠点「かなーちえ」施設長

中條美奈子さん NPO法人マミーズ・ネット 理事・ひろば全協理事

◆中條美奈子さん NPO法人マミーズ・ネット『上越市こどもセンター』

新潟県上越市は豪雪地帯のため、1年の半分は外で遊べない。そこで、広いこどもセンターには屋根つき公園の機能もある。そんなこどもセンターで行う「子育て info」は、身近な問い合わせ先であり、相談ではないと広報しているため気軽に問い合わせができる。中には何気ない子育て用品の購入についての問い合わせから、思いがけない家庭での子育て状況を把握し、適切な支援につなげたケースもあった。



また、保育園の空き状況を2週間に1回のペースで得ているため、待機状況を見ながら保育園を紹介したり、他の支援の対象と判断した場合はその対応をしている。

大切なことは、いかに地域を巻き込むかということ。また、自分と他のスタッフでは親子に対する見方や親の発言の受け取り方が違うので、ひとりよがりな支援を行うのではなく、検討会議で共有しあうことが大切である。

◆ 塚原 泉さん NPO法人親がめ 『神奈川区地域子育て支援拠点「かなーちえ』』

横浜市神奈川区では、区と地域（町内会等）の協働で14年にわたり、「すくすくかめっ子事業」として、「神奈川区すくすくかめっ子親子のたまり場」を区内44カ所で開催している。まちぐるみで青年期までを見通した子育てを支え、多様な子育ち・子育ての親子の給水所を目指している。



横浜市では3歳未満児の親の約7割が在宅で子育てをしている。虐待リスクの高い0～1歳児の親、また2歳児の親の相談も多く、1歳半健診から3歳健診の間があいている時期、第1次反抗期で子育ての悩みや困り感が高まる時期を地域子育て支援拠点はフォローしていく必要がある。

「場には力がある」。その場に関わる事で必要とされる学び（生涯学習）が、また現場に還る。スタッフやチーム間でのふり返り力が大切。そこからのエッセンスをアウトプットし、行政や地域、企業とどう協働、連携するかが課題である。利用者支援事業では、横浜市の拠点機能と連動して、利用者支援専門員が、地域と共に伴走者を育み、増やし、予防的に働きかける地域ケアシステムをつくっていきたいと考えている。

パネルディスカッション（抜粋）

【原田先生】

地域子育て支援拠点でも予防の視点で支援は行っているが、利用者支援で一層それが充実すると思われる。地域によって状況は違うが、支援者が「こんな地域があつたらいいな」と夢を語れることが大切。専門性でつなぐ、当事者でつなぐ以外にアドボカシー（代弁者）としてつなぐことも大切。

中学校区、小学校区、町内会など重層的に捉えることが必要。相談援助のスキルは必要だが、皆が専門家にならなくていい。相談・情報提供・世間話など、最初のつながりからインテークし、生活の一場面での面接を丁寧に実施するとともに、振り返り（リフレクション）も大切にして欲しい。

【中條さん】

日頃やっていることの延長線上に利用者支援はある。あきらめずに取り組んでいきたい。相談とは違う専門性、聞く力、つなぐ力も必要で、それは、カウンセリングとも違う。

【塚原さん】

利用者支援はまず始めることが大切。私たちは地域と当事者性の着ぐるみを着た専門職である。また、やりっぱなしにしない継続性も大事にしていきたい。

【奥山さん】

制度がスタートする中で、拠点の支援者は身近な親子の代弁者であることがさらに求められてくる。最初のつながり（インテーク）を丁寧につくり、家庭の状況の見極め（アセスメント）を行い、適切な支援にうまくつなげていく利用者支援を、敷居の低い拠点で実践していくことで活きてくると思う。日頃の実践活動の積み重ねが大切で、実践者同士が深めていくことが大切である。

